
魔王の暇つぶし

魔王崇拝者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の暇つぶし

【Nコード】

N6574I

【作者名】

魔王崇拝者

【あらすじ】

このお話は勇者が魔王を倒しに行く物語で、ある一つの例外を除いては、どこにでもあるお話である。

そう……その例外とは……

『はあ……暇だなあ。』

『ギル、何言ってるんだよ、俺達にはやらなければいけないことがあるだろ?』

『やることって言ってもあれだろ?』

『ああ…、当然魔王退治だ!』

これは勇者と魔王のいる究極のパーティーのお話である

プロローグ（前書き）

初めて小説を書いたのすごい駄文です！

なので宇宙より広い心をお持ちの方のみお読みください

プロローグ

ここはアディウアスと呼ばれる世界である。

アディウアスでは魔法が存在していて、それをつかって人々が生活している。

アディウアスでは人だけじゃなく魔族と呼ばれる魔物が生息している。そして魔物の中で最も強いものを魔王と呼ぶ。

アディウアスでは人は大きく別けて3つに分けられる。

一つ目は魔法を使う事に特化していて、魔物と戦う者を魔法使いと呼び、その中でも魔力が高く、さらに知識をかね揃えてる者を賢者と呼ぶ。

二つ目は魔法はほとんど使えないが武術に特化していて、それを使って魔物と戦う者を戦士と呼ぶ。しかし魔法を使えるのに武術を極める者もいて、その者を魔法剣士と呼ぶ。3つ目は魔法も武術も得意ではなく、魔物と戦わない者で、その者の事を平民と呼ぶ。

アディウアスでは人間と魔族のハーフであるエルフ族も生存している。人間と魔族の遺伝子の割合が人間の方が多いとエルフ、魔族の方が多いとダークエルフと呼ばれる。

アディウアスでは人間と魔族が争っており古くから魔王が魔族を従えて人間を滅ぼそうとされていて、人間側はそれを防ぐ為に勇者を集い、魔王討伐させているのだった。しかしそれは昔の事であり、今の魔王は人間を滅ぼそうとしていないが、17歳になった時に人類に宣戦布告しなければいけないというしきたりがあるのだった。

プロローグ（後書き）

やっぺてしまいました

第一話 魔王登場（前書き）

このサイトの使い方がぜんぜんわかんないや……
）（ゞ

第一話 魔王登場

「やっとだ…やっと…完成だ…」

つと、ある一人の少年がそう呟いた。

ここは魔族の本拠地である魔王城の最上階である。この少年の名前はグレイジア。マギルと言って魔王である。

「顔は変えたし声も変えた、知識は俺が考えた偽の記憶を与えたし魔力も与えた、後は…明日に俺がスイッチを入れるだけだ。」

そう言つてマギルは明日の17才の誕生日にそなえた。

昔から魔王のしきたりでは魔王は17才になった時には全国民に自分の存在を知らしめて、1年の猶予期間を与えて、18才になった時に魔王は侵略を開始しなければいけないのだ。

「ぐ〜」

マギルのお腹が鳴った。

「そろそろご飯にするか…おい、アーシャ！」

マギルが一人の女性の名前を呼んだ。

「如何しましたか？、マギル様」

するとマギルの前に女性が一人の女性が現れた。

実はマギルは死んだ前魔王もとい父親の遺言で17才まで魔王城の最上階から出たことがないのだ。

マギルの父親は人間には興味は無く、普通に生活をENJOYしてたのだが、魔王城を抜け出して人間の公園を散歩したら、勇者のパーティー、計30パーティーに待ち伏せされていて、その時にマギルの父は殺されてしまったのだ。

なのでマギルは最上位の魔族しか入れない最上階に引きこもりっぱなしなのだ。なのでマギルの顔を知っている者は5人しか居ないのだ。

アーシャはその5人のうちの一人で、マギルのお世話係である。しかし、5人の魔族はみんな万能で大抵の事ができるので、あまり係は関係ないのである。

「腹が減ったから飯を頼む。」

マギルがアーシャに用件を伝える。

「すすつ…こちらをどうぞ。」

アーシャはポケットからカリーメイトを取り出しマギルに渡した。

「おいっ！明日にはもうここを出るんだぞ、それなのになんでカリーメイトなんだ？」

マギルがアーシャに問い掛ける。

「おいしいからで御座います。」

マギルの問いにアーシャがキツパリと答えた。

「もういいや、……それにしてもなんとか明日までに完成してよかつたな。」

マギルが嬉しいそうに呟く。

「それはマギル様が3年前から開発していたマギル様の分身…偽魔王の事ですか？」

マギルの呟きを聞いていたアーシャがマギルに問い掛ける。

「ああ……そうだ。あのもう一人の俺が完成したんだ。戦闘力は俺の1%ぐらいだが十分だろ。」

マギルがにやけながらアーシャに説明する。

「そうですか……なら、マギル様は明日には本当に旅に出かけられるのですか？」

アーシャが悲しそうにする。

「俺はもうこの生活から抜け出したいんだ。」

マギルが思っている事を口にする。

「それなら……17才になれば外にも出れます！それじゃダメなのですか!？」

アーシャがマギルを引き留めようとする。

「俺に父と同じように死ねと言うのか？しかも俺は人類征服には興味がないんだ。だから……こうするしかないんだ。」

マギルがアーシャの目を見て言う。

「……………」

マギルの決意の前にアーシャは何も言えなかった。

「おっ……もうこんな時間か……そろそろ寝るかな……」
もう時間は1時を超えていた。

「お、おやすみなさい……マギル様、魔王城最後の夜……ですね。」

アーシャが涙目になりながらもマギルにおやすみを言う。

「ああ……おやすみ。」

マギルが右手をヒラヒラと振って寝室に向かう。

「あっ……マギル様　最後の夜なので一緒に……』だめなのです！
っえ？」

アーシャがマギルに言おうとしてる事を誰かに止められた。

「アーシャさん！その行為は何を意味するか知っているのですの？」

声がする方を見ると小さい少女が立っていた。

「あっ……シェリーちゃん。」

「ちゃんと呼ぶなです！」

声の主はシェリーと言ってマギルの顔を知る者の一人である。

「す、すいません……」

アーシャが謝罪の言葉を口にする。

「魔王様の寝室に入るということは婚約を意味するのですの。それ

を知ってて入ろうとしたのです?」

シェリーがアーシャを問い詰める。

「は、はい……」

アーシャがおどおどしながら答える。

「なっ…なんでそんなことをしたのですの!?!」

「マギル様を……止めたかったのです……」

「……………」

アーシャの言葉にシェリーは何も返せなかった。

「マギル様は明日……魔王城離れて何処かにいってしまうのですよ!?!? シェリーちゃんはそれでもいいのですか?」

アーシャはシェリーに意見を聞く。

「そんなの……私も嫌に決まってるです!でも……マギル様が決めた事を私たちが止める権利はありませんなのです!」

シェリーが力強く答える。

「……………」

アーシャはシェリーから目を背ける。

「もういいなのです。今日はもう遅いのです、明日……マガル様を笑顔で御送りする為に今日はもう寝るのです。」

シェリーはそう言って自分の部屋に帰っていった。

「シェリーちゃん……」

アーシャはシェリーが振り向いて歩いていくときにシェリーが涙を流している事に気づいたのだった。

そしてアーシャも自分の部屋に帰って行った。

第一話 魔王登場（後書き）

登場人物

グレイジア＝マギル

本作の主人公で魔王である。今の生活に不満を持っている。

アーシャ

マギルの顔を知っている5人の最上位魔族の一人

お世話係である。

シエリー

マギルの顔を知っている5人の最上位魔族の一人で教育係である。

第二話 魔王旅立ち

「コンコン　　ーーーーーマギル様　　起きてください、朝ですよ。」

アーシャがドアをノックしてマギルを起こしにきた。

「んん、……アーシャか…おはよう。」

マギルが眠そうにしながらも身体を起こす。

「マギル様、開発係のレイシアさんがお呼びですよ。」

「レイシアか？わかった、すぐ行くよ…それより何か食う物はないか？腹がへった。」

「それならばコチラをどうぞ。」

アーシャがポケットからカ　リーメイトを取り出し、マギルに渡す。

マギルはそれを受け取りまたこれか…と言いつつもそれを食べる。

「んじゃ、そろそろレイシアの所に行くか。」

「はい」

そう言つとマギルとアーシャはレイシアが待つマギル専門開発室に向かつて歩き出した。

開発室に行く途中、少女が一人コッチを見ながら待ち伏せしていた。

「……マギル様……」

「お、ベリアか…どうしたんだ？」

ベリアはマギルな戦闘教育係であり、常に刀を腰にぶら下げている。

「……レイシアの所に行くなら私も行く……」

それだけ言うと黙ってマギルの後をついてきた。

そうしてしばらく歩くこと3分……開発室の前に着いた。

「レイシア、入るぞ」

そう言ってマギル達3人は部屋に入った。

すると3人の少女が部屋の中心に立っていた。

「あ、マギル様、待っていたわ。」

彼女の名前はレイシアと言って、いろんな物を開発していて、偽魔王をマギルと一緒に開発したのも彼女である。

「おう、ほんで偽魔王の方はもう準備できてるのか？」

「はい、何時でも起動できます。」

そう言って、レイシアは偽魔王が置いてある部屋の端の方をみた。

「そういえば、あれはどうやって動かすのですか？」
部屋に待っていたもう一人の少女、シェリーが疑問を声にした。

「あれはにせま『あれは偽魔王の心臓部分に大きな魔石が入っていて、それにマギル様が魔力を送る事によって起動するのです。』」

「ミラ……ひどいわ……私が言いたかったのに……」

「さすがミラだな……情報が早いな……」

レイシアの説明を中断させて、偽魔王の説明をした人物はミラと呼ばれていて、情報係である。

「それじゃ……旅の必需品を用意するか……アーシャ、万能バッグと3ギラ程頼む」

「わかりました。でも……たった3ギラでお足りになりますか？」

「ああ、大丈夫だ、足りなかつたら向こうで貯めるか、金を届けるように頼むかもしれない。」

「それならば、よろしいです。」

万能バッグとは非常食や、魔力回復グッズ、などなどが4次元のバッグに入っているのが万能バッグでマギルが10才の時にレイシアに作って貰った。

次にギラ。

この世界の貨幣は

小さい銅貨が日本円で10円

大きい銅貨が100円

小さい銀貨が500円

大きい銀貨が1000円

小さい金貨が1万円

大きい金貨が10万円である。

ギルは更に上のお金で1ギラ100万円である。

「後は……剣だな……」

「マギル様……これを……」

マギルが剣をどうするか迷っているとベリアが赤と黒色の魔力でコーティングされた双剣を渡してきた。

「これは……？」

「それは、先代の魔王様が使っていた武器ですけど、一回も使われずに倉入りした武器です。たぶんベリアはマギル様にその武器を使って欲しいのでしょう」

口数が少ないベリアの代わりにミラが説明する。

「そうか……それならコレでいいや。」

マギルは両腰に一本ずつ双剣を差した。

「マギル様、必要な物をお持ちしましたよ」

必要な物を取りに行ったアーシャが戻って来た。

「おお、サンキューな」

「いえいえ……後、マギル様、コレを飲み込んで下さい」

アーシャが飴玉みたいな物を渡してきた。

「ゴク……それで、これはなんだったんだ？」

「これはレイシア様が開発した飴です。」
「レイシアの開発した飴？レイシア、コレはどういう効果があるんだ？」

マギルがレイシアに問い掛ける。

「この飴を飲んだ者は魔力波長を合わせる事によって遠くに離れていても話す事ができます。」

「おお！それは便利だな。」

「はい、マギル様が旅立つ決心をしてから3年の月日を掛けて開発しました。」

「俺の為にそこまで……本当にアリガトな。」

「お褒め頂き幸栄です」

「んじゃ、そろそろ行くわ……俺が魔力を偽魔王に込めたら俺がワープすると同時にこの部屋が爆発するようになって……だからみんな部屋から出て行ってくれ……あ、あとこの魔王の事も頼んだぞ……頼りにできるのはお前だけだ。」

「……はい」

「んじゃ、行ってくる。」

「……行ってらっしゃい、マギル様」

こうして俺は偽魔王に魔力を込めた……すると満杯になると同時に爆発音と共に世界が真っ暗になり、意識を失って行った。

第二話 魔王旅立ち（後書き）

レイシア

魔王の顔を知る5人の内の一人で開発係である。

よく、マギルといろんな物を開発している

ベリア

魔王の顔を知る5人の内の一人で戦闘教育係である。その実力は…

……？

口数が極端にすくない

ミラ

魔王の顔を知る5人の内の一人で情報係である。

世界中の情報を集めて、マギルに伝えている。

第三話 魔王と協会

「んっ……………ここは……………」ふと、目が覚めた。
立ち上がり前を見ると……………

「女神……………の像？」

女神の像が立っていた。

「これは……………初代女神ラファエロの像か…するとここは教会かな？」

周りを見渡すと教壇と椅子しかない……………やはりここは教会なようだ。

「ん？あれは……………」

女神の後ろには一枚の絵があった。

「これは初代の魔王と女神か？」

その絵は、魔王が魔物を、女神が勇者達に命令している絵だった。

「それは、初代の魔王と女神の戦い【始まりの聖戦】だ。」
うしろから声がした。

「誰だ！」

と言いつつ後ろを向くと8mくらい離れた所に一人の男がいた。

この距離まで俺が気づけなかっただど！？話しかけられなかったら、どこまで接近を許していたか……………

「それは俺のセリフだ。ここは特別な人間しか入れないはずだが…

…まあ、俺も半年前になったばっかりだけだな。」

「人間!？」

そうか……ここはもう魔王城じ%

「ああ、ファエロの神殿だ。ここには一般人は入れないはずだが……」

そうか、ここは女神ラファエロの出身地のファエロか……。だから教会なのに人がいなかったんだな……。こういうときは……

「すまない、知らなかったんだ。」

こう言うのがベストな選択なはずだ!

「いや、……この扉は普通の人は開けられないはずだが……。それに右手の紋章も無いって事はもうひとつの方もあてはまらないな……」

まずい!話をそらさなければ……

「たしか、ファエロの神殿は祈ればラファエロの加護を得られるって聞いた事があるが……。何か困ってることがあるのか?」

「え?……ああ、実はこの町は新たな仲間を見つけに来たんだが……仲間が一人はぐれてしまったんだ。」

よし、会話はそらせたか……

「仲間が一人つて事は他にもいるのか?」 俺がそう聞くと男がいきなり焦りだした。

「しまった!あいつを待たせたままだった……。早くしなければ!それじゃあな、謎の少年!」

「お、おう、……つてお前も俺と同じくら………まあ、いいか………」

男は話も聞かずに女神に一礼すると、走って去っていった……

「あ、そうだ！あいつの話によると俺は扉を開けられないらしいからな………はやく出ないと………」

さいわい扉が閉まるのはゆっくりだったので、なんの苦もなく外に出れた。

外に出ると明るかった。たぶん昼頃だろう、この教会は階段を登った所があるので下まで行くのに5分もかかってしまった。途中で思ったのだが、あの男はどこに行ったのだろうか………教会を出たのは10秒くらいしか差はなかったのに教会を出るとあの男は既にいなかった。

「おお………人がいっぱいだ………」

下に着くと人がいっぱいでにぎやかだった。いままでは生物なんて5人までしか見たことはなかったが、今、目の前には数えきれない人がいる。マギルはこの人の数に少し感動した。

感動も束の間、いつの間にか自分のお腹が減っている事に気づいた。

「お腹がすいたな………、リンゴでも買おうかな。」

彼は目の前にある果物屋に足を運んだ。

あれから大変な事になった。

彼は1ギラしか持っていなかったの、当然果物屋がお釣りを払えるわけもなく、果物屋の店主が近くの店にお金を借りに行った。リング1個の為にあれだけ汗を流すなんて利がないだろう……。なので100倍の値段で払っておいた。すると、それを見ていた近くのお店の方々が自分の商品も買ってもらおうと、俺に群がって来たのでその場を後にした。

「止めてください!!」

あれから逃げて、裏道を歩いていると奥から女性の叫び声が聞こえてきた。

声のする方に歩いて行くと、自分と同じくらいの女性が子供達2人を後ろに庇いながら3人組の柄の悪いおっさんと対立していた。

第三話 魔王と協会（後書き）

女神……勇者達を束ね、世界の平和を築く者。

魔王……魔物を束ね、世界を征服する者

勇者……女神の代わりに魔王と戦う者。女神は攻撃の光魔法が使えないが、勇者には攻撃系の光魔法が使える

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6574i/>

魔王の暇つぶし

2010年10月10日02時18分発行